

加速する時間あるいは人間の自己破壊

——二十一世紀におけるゲーテの現実性——

マンフレート・オステン

山崎達也 訳

イギリスの上院議員が、ある日、演説をしました。原稿の三ページ目をめくつたら、白紙でした。そこには、スピーチライターが、こんな一言が書いてありました。「あとは自分でやれ、この老いばれ！」

本日は、こんなことになってはいけなくて、原稿なしでお話ししたほうがよいのではないかと考えました。

一 クロノスとカイロス

「加速する時間」というテーマは、まだ時間の加速

きな文化的影響を受けた、より深い理由の一つなのかもしれません。

一八七二年に導入されたものは、あるギリシャ神話すなわち「クロノス」の神話に結びつけられる時間計算法でした。それは憂いの時間観念であり、未来の時間観念でした。

ご存知のとおり、ヨーロッパの時間測定はクロノメーターによって行われましたし、今日でも行われています。

クロノスは、「汝の子どもの一人が汝の後を継ぐが、汝はその子どもに殺され、王権は失われるであろう」と予言された神です。そのためにクロノスは生涯ずっと、妻のレイアが産んだ子どもをすべて殺して、しかも、自分で食べ尽くしてしまいます。これについては身の毛もよだつ恐ろしい絵がありますね。しかし、彼の妻は一人の子どもを隠すことに成功します。その子どもの代わりに、産着にくるんだ石をクロノスに差し出し、彼はその石を食べてしまうのです。

たいへんに残酷な話ですが、ここではクロノスのイ

がなかった時代へと、わたしたちを引き戻します。その時代とは、日本の一八七二年以前の時代なのです。

ドイツの多くの方はご存知ないかもしれませんが、日本では一八七二年（明治五年）に、すなわち明治時代に、ヨーロッパ的時間（太陽暦）が導入されました。それまでは、日本ではまったく別の時間の計り方があったわけです。

つまり日本は、十九世紀の終わりまで、時間のヨーロッパ的計算法を受け入れなかった国なのです。このことが、ゲーテが他のどの外国からよりも日本から大

メージは、「憂い」に駆り立てられる姿とまさに結びついています。これは、のちほどゲーテに関してお話しする中心的テーマになります。

これに対して日本は、まったく逆のイメージすなわちギリシャ語で「カイロス」といわれているものから自らの時間観念を発展させました。これは「幸福な瞬間」という意味です。

その時間観念は今日でも日本のあちこちで、たとえば神道だけではなく仏教のなかでも生き続けています。また一連の生活様式のなかにも目にすることができます。

この時間観念の起源は、それほど過去の時代ではありません。少なくとも他の国、なかでもヨーロッパと比べれば。

日本の創世神話に立ち返って考えてみますと、日本は、有名な神武天皇によって創られたのですが、彼が国を創ったのは最終的には幸運な偶然、すなわち太陽の女神である天照大神に負っていたことがわかります。神武天皇がある決定的な戦いに勝たねばならなかった

ときに、彼の軍の背後から、この女神すなわち太陽が出てきて、敵の軍隊に光を照射して、目をくらまします。それで神武天皇は勝利者となり、その結果、国を創ることができたというわけです。ここには、わたしたち西洋人の生活をすみずみまで支配しているクロノスという時間観念とはまったく別の性格をもった神話があります。

「クロノス」と「カイロス」との対照性についてお話ししました。

今日、わたしが話の合間に繰り返す音楽を差しはさむ理由をわかっていただくために重要だと思ったからです。

ところで、イタリア語に、すばらしい言葉があります。サリエリのあるオペラのタイトルにもなったのですが、*Prima la musica, poi le parole* つまり「まず第一に音楽、次に言葉」という言葉です。⁽¹⁾時間の経験にとつて、音楽は——わたしたちが合間合間に少しだけしか聴こうとしないものですが——ひじょうに特別な意義をもっているのです。

として逆らい、いかなる幸運な瞬間であつても、そこに留まることを拒みます。

「性急さ」は実際、ゲーテのこの悲劇の中心的テーマなのです。

この意味するところは、わたしたち現代人が実はファウストと関わり合いをもっているということです。ファウストのメフィストとの契約は、すべての呪いのうちで最も現代的かもしれないものの兆しのなかで交わされました。というのは、

「なによりも忍耐に呪いを！」⁽³⁾

とファウスト自身が言っているからです。

厳密にいうと、この呪いはメフィストが立っている足場であり、そして今や、メフィストはすべての器具、すべての現代的な「性急さ」の道具をファウストに提供することになります。これらの道具のいくつかを挙げてみましょう。今日では別の名前になっていますが——

まずは、ファウストが自由に使える「すばやいマン」のことを、おそらくみなさんは思い出すでしょう。

二 『ファウスト』の現代的意味

本日の講演の本来のテーマ、「加速する時間あるいは人間の自己破壊」の話を始める段階にきました。ドイツ文学のなかに一人の主人公がいます。お望みなら、こういえるかもしれません。彼は、今日まで意義深かったといえる十八・十九世紀の主人公であつた、と。その主人公とは、すなわちファウストです。ファウストは、これまで述べたような「幸運な瞬間」に巻き込まれること、つまり「カイロス」を断固として拒んだ人物です。

ファウストは悪魔である自分のパートナーと賭けをし、彼に言います。

「わたしが瞬間に向かって

『止まれ、おまえはじつに美しい！』と言ったら、

おまえはわたしを鎖につなげてよい、

そうしたら、わたしはよるこんで滅びるだろう。」⁽²⁾

ファウストは自らの存在の最深处で焦燥感にさいなまれているために、いかなるカイロスであつても断固

これは、わたしたちが想像できるどんなに速いロケットよりも速い乗り物です。ボタンを押すだけでファウストを過去に送れるマントです。『ファウスト』の第二部で、何千年も前の「古典的ヴァルブルグスの夜」にまでも彼は行けたのです。

また、「すばやい剣」すなわち兵器があるのを思い出されるでしょう。これは、イラク戦争関連のテレビ画面でも見られる電子兵器よりもなお速いものです。それは、皇帝のために戦闘に勝つ総司令官へとファウストを昇進させるまで、いかなる敵にも勝利できる兵器なのです。

さて、皇帝はそのとき、現代のものよりも明らかにひどい借金地獄に落ち込んでいたのですが、ファウストは皇帝のために「すばやい金」を案出しました。すなわち紙幣を皇帝に造ってあげましたが、ファウストは紙幣が破局へ向かっていくことをすでに知っていました。紙幣は非常に速く消えていきます。

このようにファウストは「最も速い移動手段」「最も速い武器」「最も速い金」を手にします。この観点から

いえば、わたしたちは二十一世紀において、現代の現実の「神」を手にかけているわけです。

ファウストはさらに、「すばやい愛」の発見者でもあります。ご承知のとおり、これはすごい速さを要求する現代の願望ですが、彼は即座の変身と数十年前に若返ることを、メフィストに要求します。それでファウストはマルガレーテの愛を得ることができですが、しかし、その結果、殺人と狂気の轍を残すことになりました。

そして、第二部で、現代人が忘れていた狂気乱舞のなかに再び現れ、忘れられている霧のなかで新しきことを実行に移すことになります。

ですから、即座の変身と数十年前への若返りは、加速する世界文化・生活文化の前兆のなかから現れてくるクロノスの亡霊なのです。

これを、ゲーテは「すべてはヴェロツイフェーリシユだ」(alles veloziferisch)⁽⁴⁾と公式化しました。ラテン語の *velocitas* すなわち速度という概念と、*Luzifer* という概念すなわち悪魔とを結びつけた言葉であり、「悪魔的な

慌ただしさ」という意味です。このような「悪魔的な慌ただしさ」が『ファウスト』のなかで、どのような結果をもたらすのか、どのような自己破壊行為へと行き着くのか、とりわけ今日のわれわれにとって、どれほどの範囲にまで及んでいるか、ということがおわかりになると思います。

三 歴史的背景

さて、先に進む前に、おそろく次のような疑問をおもちだろうと思います。ゲーテはこのような考え、すなわち「悲劇を加速する時間」という考えを、そもそもどのようにして抱いたのか？ これについて申しますと、ゲーテの目には、当時の多くの歴史現象によって、ファウストの悲劇が、すでに見えていたのです。

ゲーテにとって重要な現象の一つはフランス革命でした。フランス革命では「性急さ」、言いかえれば、革命の大きな理念が即座に実現されることが望まれていたわけですが、これが多くの命を奪うことを、ゲーテはわかっていたのです。みなさん方は、フランス革命

が結局、ギロチンの血の海に沈んでいったことを思い出されるでしょう。つまりは、現代の慌ただしい大きな流れが、ゲーテにとって早くも眼前の事実だったということです。

そのあとに登場してくるのが、ゲーテが生きた世紀のかの有名な最高司令官ナポレオンです。ナポレオンは、近代の電撃戦の最初の武将です。ナポレオンは当時のアンシャン・レージュム(旧体制)の常備軍を、加速することで打ち負かしました。彼は戦略と戦術として、「ヴェロツイフェーリシユなもの(悪魔的に慌ただしいもの)」を作りあげました。それによって彼は、小回りのきく小部隊を旧体制の大隊の後方に回らせ、包囲し、その一部に壊滅的な打撃を与えました。このことをゲーテは非常に詳細に調べています。

これは二十世紀になって再び取り上げられました。つまり二十世紀の主要な戦略、悲惨な戦略は、電撃戦の武将ナポレオンに直接由来するものなのです。

シュリーフェン (Alfred Graf von Schlieffen, 1833-1876)⁽⁵⁾ は、ナポレオンがウルムで連合軍を電撃的に包囲したこと

をヒントに、自らの後方戦法を練り上げました。またグーデリアン (Heinz Guderian, 1888-1954)⁽⁶⁾ が、加速された戦車戦すなわち第一次世界大戦の電撃戦を研究したさいのヒントは、ナポレオンが(一八〇六年に)イエーナとアウアーシュテットでの勝利を追い求め追撃したことであり、プロイセンへの追撃でした。ご存知かもしれませんが、このときゲーテは危うく命を落とすところでした。

ゲーテは、加速されることに関するこれら二つの要素——フランス革命的「性急さ」とナポレオンのスピード——が相まって、とりわけ当時、交通手段が急速に加速されたことによって完成されていく姿を見てとるのです。

ゲーテが死の床でも読んでいた最後のものは、どうやら鉄道旅行、正確には(イギリスの)マンチェスターとリバプールを結ぶ最初の鉄道旅行のことを書いた文章でした。ドイツに鉄道が敷かれたのはゲーテの死後でした。

ゲーテは、バイエルン王ルートヴィヒ一世への手紙

で、鉄道旅行について書いています。

「人間は、包装された品物同然に、もつとも美しき景観のなかを突っ走っていきます。もはや、いかなる国も知られることはありません。プラムの香りは消え去っていきます。」⁽⁷⁾

これが、二十世紀と二十一世紀の旅行時代を、はるか前から先取りしていた、ゲーテの洞察です。

四 「悪魔的に慌ただしいもの」

ゲーテは、すべての生活環境が全体としてこのように加速していくことを、一八二五年にベルリンへ送った手紙のなかで書いています。

ゲーテのベルリン訪問はたった一度だけ、それも立ち寄っただけでした。カール・アウグスト大公のお供をして行かねばならなかったのです。一七七八のことです。ここでゲーテは、小さなヴァイマル大公国がプロイセンによって「バイエルン継承戦争」に巻き込まれないよう全力を尽くしました。

そのとき彼は、フリードリヒ二世の戦争兵器を見た

しは考えています。⁽⁹⁾

これは、手紙の追伸に書かれているものですが、ゲーテはこの手紙を実際には送りませんでした。というのは、この当時ゲーテが第一に考えていたことは、相手に受け入れられることだけを話すべきであるということだったからです。この当時に生きていた人でさえ「平穏な時代である」と考えていたほどですから、手紙の追伸でこのような破滅的状况をゲーテが書いていることを彼の甥の息子が知ったならば、さぞかし「奇妙なことだ」と思ったに違いありません。

五 『ファウスト』第二部第五幕の意味

ところでゲーテは、『ファウスト』第二部のことで苦闘していました。これは本来、現代の「加速化という悲劇」が全体としてすでに論じられている作品なのです。

この作品がいつか同時代人に読まれることをゲーテは危惧していました。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトへの手紙を、彼は次の言葉で結んでいます。

のです。そして、将来の戦争の方向を変えてしまう恐ろしいシナリオが、ここに現れているのではないかと大変に恐れています。

以来、ゲーテは二度とベルリンには行きませんでした。ベルリンは彼にとつて、この世界のヴェロツィフエーリシユなるもの（悪魔的に慌ただしいもの）の中心だったからです。彼は「ヨーロッパで、ベルリンほど神を畏れない場所はない」と述べています。⁽⁸⁾

今から見ますと、まだそのころはベルリンも平穏で静かだったのではないかと思えるのですが、その時代にゲーテは、すでにそう考えていたのです。

そして一八二五年、一通の手紙のなかで、現代われわれがもっている傾向を文章にしています。その手紙は、ベルリンにいた彼の甥の息子ニコロヴィウスに宛てたものですが、ゲーテにはめつたに見られない最上級が使われています。こう書いています。

「次の瞬間には前にあつたものをすべてヴェロツィフエーリシユに食べ尽くしてしまうのは、なにことも成熟させない、今の時代の最大の不幸であると、わた

「混乱した行為に関する混乱した話が、世界中を支配しています。」⁽¹⁰⁾

ここで、『ファウスト』第二部でゲーテが予測したことに、もう一度戻らせていただきます。この第二部は、現代の必読の書に入れてもよいのではないかと私は考えているのですが、残念ながら、今日までその核心的内容が最も知られていないままの作品の一つです。

みなさんに、ちょっと現実的なこととして思い浮かべていただきたいことがあります。それは、ファウストが第二部でうまくやり遂げなければならない新しい冒険——紙幣の製造や、いわゆる僭帝に対して皇帝のために戦う戦闘など——これらを乗り越えた後で、最後に第五幕で、今度は実にヴェロツィフエーリシユ的なものをファウストは賛美するということです。

このファウストの行動を、最も整備された文化、厳密にいえば、今日わたしたちがそれを知っている形式のなかで思い浮かべていただきたいのです。さらにファウストが生涯の終わりに、どのような状況で現れてくるのかも思い浮かべていただきたいのです。

ファウストは僭帝を負かしたので、皇帝から所領として大きな土地を与えられます。その一部は海に面していて、ファウストは今度そこを開発しようとしています。実際には、これが没落の第一歩でした。「支配権と所有権を獲得するのだ」とファウストは語っています。この点、ファウストは、すでに二十世紀、二十一世紀に生きていたことです。支配権と所有権は、この世で本当に人間を至福にいたらせる奇跡であると彼は信じます。これがすなわち、彼が落ち込んだ大きな誤謬なのです。

この（没落への）一歩に対して、メフィストは皮肉をこめて、こう論評します。

「愚者の機知をほめた以上は、今宵、彼は大地主になることを望むだろう。」⁽¹²⁾

ファウストは今や自分の領地に赴き、そこで何人もの人を使う大領主の一人になっています。そして今度、巨大事業を始めます。このような大事業に関して、当時ゲーテはすでに、サン・シモン主義者のものを詳細に調べていました。「新しい事業を次から次へと

構想すること、世界は完全なものとなる」という思想が、サン・シモン伯によって当時すでに現れてきていました。これこそが、わたしたちがまさに今日、朝から晩まで関わっていることです。

ゲーテは、すでにこう述べていました。「新しい事業が差し出されている。君は関わりたいと思うか。」

ゲーテの答えはこうです。「もうすでに破産させてしまった。他の人に廻したい。」⁽¹³⁾

これが、『ファウスト』第二部第五幕で、わたしたちが置かれている状況なのです。これは、ここで実行されている大事業、すなわち「たえず未来へと志向し続ける事業」のことです。わたしたちはここで再びクロノスのもとに、すなわち「ひたすら未来を志向する意識の時間」「憂いを抱かせる時間」のもとに戻るになります。

六 憂い

『ファウスト』の中で、本当に大きな現代的悲劇が起ります。つまり、ファウストに不吉な予感を抱か

せる四人の年老いた女が登場するのです。四人は鍵穴からファウストのいる部屋に入ってきますが、そのうちの三人は出て行きます。残った一人の老女は「憂い」

(Gorge)でした。

「憂い」については、ハイデガーはすでに『存在と時間』のなかで、現代人の「死に至る病」⁽¹⁴⁾、すなわち未来の方向へと意識する性急さを意味すると述べています。

今日、最も深いところでわたしたちをかき立てるもの、それが憂いです。

この憂いが登場し、ファウストに語ります。「人間はその全生涯にわたって盲目なのです。さあ、ファウスト、あなたもついに盲目になりなさい」⁽¹⁵⁾。憂いがファウストに息を吹きかけると、本当に彼は盲目になってしまします。

不気味でまったく現代的な隠喩、すなわち目がくらみ失明することが、ここでは、憂い自身がファウストに対して説明する事象にたとえられています。すなわち、「わたしが一度つかまえた者には、全世界は何の役

にも立ちません」⁽¹⁶⁾と。

ここで述べられているのは、大きな力をもった言葉です。この言葉をもってゲーテは、現代人を前もって、たしなめているのです。しかし、この言葉が語っているのは、これだけではありません。憂いとあらゆる生活環境が加速していく兆しのなかで、まったく別の不気味なことが現れてきます。

どういふことかといいますと、ファウストは（老女「憂い」に会う前に）自らの「性急さ」の絶頂に達します。

彼はあらゆるものに心底いらだち、皇帝から与えられた所領に、古い壊れかけた小屋があることに腹をたてます。その小屋には、二人の老夫婦パウキスとフィレモンが住んでいます。そのうえ、小さな礼拝堂があるので、その鐘がたえずカランカランと鳴り響いて、ファウストの心を乱します。

彼は力強い三人の助手《あらうで》⁽¹⁷⁾《早とり》⁽¹⁸⁾そして《堅もち》⁽¹⁹⁾に、老夫婦をなんとかして急いで片づけるように命じます。そこで、この三人は出て行き、フィレモンとパウキスを殺してしまいます。三人はファ

ウストのところに戻ってきて言います。「全速力でここに戻って来ました。お許しください、平穩無事とはいきませんでした。」⁽²⁰⁾

するとファウストには、二人を殺したことは明らかに性急すぎたことが突然わかるのです。

星のひそやかな輝きの瞬間、突然に彼は自分の本当の悲劇であるものをあらわにします。彼は語ります。

「急いで命令したことが、早すぎてなされてしまった。」⁽²¹⁾

興味深いのは、この二人の登場人物フィレモンとパウキスによつて、ファウストの古い記憶がすべて消え去ってしまうということです。ゲートは述べています。

「わたしたちが野蛮人でないのは、ただわたしたちのうちに古代の残余があるからなのです。」⁽²²⁾

というのもゲートは、たしかに生を生きるのは前に向かつてであるが、生を理解するのは後ろを振り返ることによつてのみできると確信していたからです。

さて、すべての過去を消し去ってしまう結果、今日のほんの少しの記憶しかもたないことになります。このような場合、昨日の日刊新聞を読めば、わたしたち

はすでに歴史家になっています。ここでもさに起こっていることがすべてなのですから。

ファウストは記憶をまったく無くすことで、「ただ未来だけを志向する世界」のための空間を作ります。彼は同時に、老夫婦を訪れた者をも消してしまいます。こういう彼はもはや放浪者と化したゼウスです。ギリシャ神話を少しご存知の方は、ゼウスが密かにパウキスとフィレモンのところを訪れ、ともに殺してしまうことを知っておられるでしょう。

つまり、ファウストはここで宗教と形而上学を同時に葬り去ったのです。ファウストが実際に成し遂げたことは、ニーチェ (Friedrich Nietzsche, 1844-1900) が公式化したこと、すなわち「神は死んだ」(Gott ist tot) の実行です。ニーチェはそもそも『ファウスト』を早くから詳細に読んでいたので、十九世紀末には、すでにこう述べています。「静けさの欠如から、われわれの文明は新しい野蛮へと招き入れられる。」⁽²³⁾

このような野蛮は、今、『ファウスト』のなかでもなされています。第五幕でいえば、それは過去の消去や

人間の殺害だけではなく、まったく別の不気味な場面においてもなされています。というのは、ファウストはここですでに、彼のために運河を建設しなければならぬ「強制労働者」を支配しているからです。彼らについては「人身御供の血も流されたはずです。毎晩、苦悩の悲鳴がひびいていました」といわれています。この言葉の意味を二十世紀そして第三帝国へと拡張してみると、この隠喩にどのような意味が付けられるか、みなさんは容易に想像できるでしょう。

あの「最大の誤謬」も、ここで見ることになります。すなわちファウストは強制労働者が作った排水溝を自らの墓と取り換え、結局ここで破滅していくわけです。つまり、ゲートはこのような性急な行動、すなわち第五幕で起こるとてもない現代的悲劇において、最終的にこう予見しているのです。象徴としての「性急さ」にまつわるもののなかで、とりわけ二つの恒常的なものが将来、人間性につきまとうであろうと。つまり、「誤謬」と「暴力」です。「性急な思考」としての誤謬と「性急な行動」としての暴力です。

ゲートは、ボアスレーに宛てた書簡においても、人間の歴史において変わらぬものとして信じられるものが二つあるとしたならば、残念ながら、それは誤謬と暴力であると述べています。

七 性急さ

性急さについて、ちょっと考えてみましょう。このことはゲートの作品を概観することに通じると思います。これは、ゲートについて研究史的に基礎づけられたものとはまったく違う考察、すなわちゲートが達したさらなる深みへといたる考察に関連していることです。

それはつまり、人間には存在論的に、根源的に具わっている欠陥があるという大きな問題をゲートは洞察していたということ、つまり人間は「急ぎすぎる」という根源的な傾向をもっているということです。あるいはカフカが述べたように、「人間を樂園から追い出し、つねにそこから遠ざけているのは性急さである。」⁽²⁴⁾ということなのです。

ゲーテは、わたしたちの脳神経系のなかに「性急さ」をとらえていました。これに関して、まったく風変わりな方法で証明した脳研究の成果もあります。

ゲーテはこう言っています。「理論とは、現象からうまく逃れたいとする不安に駆られた悟性の性急さである」⁽²⁸⁾。つまりゲーテは、わたしたちが結局のところ、現象を恐れるあまり、たえず「誤謬」と「理論」を生産し続けているという考えを出発点としてもっていたのです。

わたしたちは世界を理論化することで、世界を規定します。あらゆる事実は、わたしたちにはすでに理論となっけています。つまり現象である世界のカオスは、疑わしきものと呼ばれることで払いのけられます。しかし、カオスが真に解決されることはなく、世界の大きな謎として、その後も存続し続けるのです。わたしたちは、それらを理論によって「処理」したと、自分を欺いて信じこませているにすぎません。

ゲーテはこう表現しています。「きみたちが矛盾によってわたしを混乱させなければよいのだが。人は話し

出したとたんに、すでに迷い始めるのだから」⁽²⁷⁾

ゲーテが心底思っていたことは、わたしたちが言葉と思考によって、とどのつまりは、たえまなく急き立てられる行動をするにいたり、それとともに、一つの誤謬から他の誤謬へと絶えず移っていくのだということです。

そうだとすると、最終的に次のような質問が出てくることでしょう。

「この悪循環から脱出するために、ゲーテ自身は何をしたのか」と。

実は、目立つことはほとんどないのですが、効き目のある薬があるのです。この薬は、しかしながら、最初に思いつくということはほとんどありません。

それは、ニーチェとの関係で解釈したほうがいいのではないかと思える文章に関連しています。ちなみに、ニーチェはゲーテをまるで自分自身のように読んでいまして、近代に著されたすべての書物を載せた馬車を、ゲーテと（その『対話』の相手である）エッカーマンとのほんのひと時と交換したいくらいだと述べているほど

です。

ニーチェはリヒャルト・ワーグナーのマイスター・ジンガーについて、こう述べています。

「この音楽はドイツ人のようだ。これは一昨日のものであり、明後日のものだ。これには依然として今日がない」⁽²⁸⁾。

ゲーテは、おそらくヨーロッパのなかで唯一の、ドイツのなかでは間違いなく唯一の、この《今日》をもっていた人でした。ゲーテにとって、ヴェロツイフェーリーシユなものに対する「薬」とは、わたしがはじめにお話したこと、すなわち「カイロス」だったのです。

八 瞬間の永遠性

ゲーテは「現在」ということ、この「瞬間」の永遠性ということを何よりも尊重しました。そもそもの次のような箴言を全生涯の土台としていました。

「わたしが崇拜する唯一の女神は現在です」⁽²⁹⁾。

これはたしかに、この世で一番難しいことです。自分自身で考えてみると、言うに言われぬほど難しいこ

とです。ゲーテはこの難事を全生涯を通して実践し、全作品を機会詩 (Gelegenheitsdichtung) として、日本でいうならば、いわば俳句として見ていました。つまり、自らの全作品を「永遠性の瞬間」の発露と思っていたのです。この「永遠性の瞬間」から感動の詩が生まれ、大きな作品となっていたのです。

ゲーテは述べています。「ここがロードスだ。さあ、跳んでみせよ。なんじ妖精よ。この機に詩をつくってみせよ」⁽³⁰⁾。

ゲーテは全作品についても、人生についても、特定の機会につくられていく一つの大きな芸術作品と理解していました。それは、彼が世界で最大かつ最も困難と考えたことに常に戻るためです。つまり、『イタリヤ紀行』で述べているように、本来、「健全で幸福な瞬間を、生きているうちにできるだけ多く」集めようとするべきなのだと述べています。⁽³¹⁾

それは、わたしたちが現実には到達できる最高のことであるはずですが。それは、最大に健全で幸福な瞬間です。その瞬間は、自分自身を「現在」に完全にささげ、

「現在」を真の女神としてたたえ、最も生き生きとしたものを尊重することによって、最終的に開かれるのです。その「最も生き生きとしたもの」とは、ゲーテにとつては「生命」でした。この意味において、彼にとつて生命は尊厳でした。生命は、彼にとつては「現在のなもの」の顕現だったからです。

生命あるものとは、ゲーテにとつては、最も生き生きとしたものであり、最も現在のなものでした。そのため彼は自然も尊重し、さらには加速に対するもう一つの「薬」として、「芸術」も尊重しました。彼は芸術のなかに、とりわけ一つの芸術作品がつくれる場合において、その内部へと「瞬間の永遠性」が入りこんでいく可能性をみていました。

したがってゲーテは芸術作品を、ヴェロツィフェーリシユで不気味な傾向性それ自体に対抗するものであり、その傾向性と対立する世界を彼自身の胸中につくる大きな可能性であると考えていました。

さらに「性急な思考」の傾向性すなわち誤謬に対しても、なお究極的に効き目のある「薬」を開発しました。

思います。

最後に、わたしのゲーテ解釈に、ゲーテ自身の文章を当てはめたいと思います。

「解釈するさいには、思う存分、やりなさい。そしてもし解釈しきれなかったとしても、その根底には（解釈の及ばない）何かがあるのだ。」⁽³⁴⁾

ご静聴、まことにありがとうございます。

訳者あとがき

本講演は、二〇〇四年四月二十四日、ドイツSGIのヴィラ・ザクセン総合文化センターで行われたものである。講演者のマンフレート・オステン (Manfred Osten) 博士は、一九九五年から二〇〇三年まで、アレクサンダー・フンボルト財団の事務局長を務めた。

博士は、一九三八年一月十九日、旧東ドイツのメクレンブルク、現在のルートヴィヒルスに生まれた。ハンブルクおよびミュンヘン大学で法学、哲学、音楽学そして文学を専攻し、一九六九年、「シェリングの初期著作における自然法概念について」で法学の学位を取得されている。その後、外交官としてフランスを皮切りに、カメルーン、チャド、ハンガリー、オーストラリアに赴任され、一九八六年から一九九二年までは東京のドイツ大使館にて広報部長そして文化部長を務

た。それは、ドイツではあまり馴染みがないかもしれませんが、つまり「皮肉」のことなのです。皮肉は、イギリスではおそらくよく知られています。ゲーテは述べては、ほとんど馴染みがありません。ゲーテは述べています。「自分自身をからかうことのできない者は、断じて最良の人ではありません。」⁽³⁵⁾

ゲーテは「皮肉」を自嘲——自分自身に対する皮肉な態度——としても発展させました。そのことをゲーテは、私たちがすべての言動を是が非でもつねに抑制すべきだということ、そして現在の言動がもしかしたら間違いだ証明されるかもしれないというように理解していました。ですから、なにことも無条件に受け入れるべきではないのかもしれませんが。

ゲーテは、ボヘミアのシュテルンベルク伯にこう語っています。

「進歩的に見えるものであっても、それほど尊重することなく、皮肉を込めて取り扱い、そのことで疑わしいものを描き出しましょう。」⁽³⁶⁾

この言葉をもって、わたしの話を終わりにしたいと

められている。

博士は、本講演のキー概念となっている（ヴェロツィフェーリシユ）をタイトルにもつ著作『すべてはヴェロツィフェーリシユだ。あるいはゲーテのスローライフ発見——二十一世紀における一古典作家の現実性について——』（二〇〇三年）を公刊されている。この書については、「すべてのゲーテ愛好者に新しい理解をもたらす明快なエッセイ」（フランクフルター・アルゲマイネ紙）、「時代精神を伴った視線の高さで、ゲーテを描いたユニークなエッセイ」（南ドイツ新聞）等、ドイツ有名各紙から書評が寄せられている。

今回の訳出にあたり、創価大学文学部の田中亮平教授にはたいへんお世話になった。とくにゲーテの作品に関して、素人同然の訳者に懇切丁寧に教示して下さいました。この場を借りて、感謝の意を表したい。

注

(1) オステン博士は講演に先立ってピアノ演奏を披露している。そして講演の冒頭において博士は次のように述べている。

「さて、わたしが最初に立ち戻るべきものは音楽であると思います。音楽こそが、本日のテーマに導いてくれるからです。音楽は本来、時間の観念が顕現したものにほかなりません。現在という瞬間が、過去と未

来に組み合わされる」という本当に驚くべきことが音楽において起こるからです。少なくとも古典主義音楽あるいはロマン主義音楽においては、過ぎ去ったものを聴くことなしに、また来るべきものを先取りすることなしに、なにかを聴くことはできません。つまり、みなさんはある出来事、すなわち本日わたしがお話したいことに関わる時間的出来事を、すでに経験しているのです。」

- (2) ゲーテ、『ファウスト』第一部、「書齋」。
- (3) ゲーテ、『ファウスト』第一部、「書齋」。
- (4) ゲーテ、『ニコラヴィウスへの書簡』一九二五年。
- (5) プロイセンの貴族出身の軍人で、ドイツ軍の参謀総長を務めた。一九〇五年、フランスを後方から攻略する計画、いわゆる「シュリーフェン・プラン」を作った。この計画は彼の後に参謀総長になったモルトケ（小モルトケ）によって、第一次世界大戦で実行された。
- (6) 東プロイセン出身のドイツの軍人。「装甲電撃戦の父」といわれる。一九四一年のモスクワの戦いで一度は失脚したが、四十四年に陸軍参謀総長に任命される。四十五年のニルンベルク裁判で禁固刑の判決を受けるが、四十八年には釈放される。
- (7) ゲーテ、『ルートヴィヒ一世への書簡』。
- (8) ゲーテ、『ライプチヒ日記』。
- (9) ゲーテ、『ニコラヴィウスへの書簡』一九二五年。
- (10) ゲーテ、『ウィルヘルム・フォン・フンボルトへの書簡』、一八三一年。

- (11) ゲーテ、『ファウスト』第二部、第四幕。
- (12) ゲーテ、『ファウスト』第二部、第一幕。
- (13) ゲーテ、『穏和なクセーニエ』第七集。
- (14) Heidegger, Sein und Zeit.
- (15) ゲーテ、『ファウスト』第二部、第五幕。
- (16) ゲーテ、『ファウスト』第二部、第五幕。
- (17) 手塚富雄訳（『ゲーテ ファウスト 悲劇』、中央公論社）による。
- (18) 高橋健二訳（『世界文学全集二 ゲーテ』、河出書房新社）による。
- (19) 高橋健二訳（『世界文学全集二 ゲーテ』、河出書房新社）による。
- (20) ゲーテ、『ファウスト』第二部、第五幕。
- (21) ゲーテ、『ファウスト』第二部、第五幕。
- (22) ゲーテ、『K・J・ジリヒへの書簡』。
- (23) ニーチェ、『人間のあまりに人間的』第五章、第二八五節。
- (24) ゲーテ、『ファウスト』第二部、第五幕。
- (25) カフカ、『日記』。
- (26) ゲーテ、『箴言と格言』、四二八。
- (27) ゲーテ、『箴言風』。
- (28) ニーチェ、『マイスター・ジンガーへの批評』。
- (29) ゲーテ、『フリーデリケ・ブルンへの書簡』、一七九五

- (30) ゲーテ、『穏和なクセーニエ』第三集。
- (31) ゲーテ、『イタリヤ紀行』。
- (32) ゲーテ、『シュテルンベルク伯への書簡』。
- (33) ゲーテ、『シュテルンベルク伯への書簡』。
- (34) ゲーテ、『穏和なクセーニエ』第三集。

(マンフレート・オステン／アレクサンダー・フンボルト 財団元事務局長)

(訳・やまざき たつや／東洋哲学研究所研究員)